

東京工大クロニクル

Tokyo Institute of Technology Chronicle

No. 357

July 2001



日産ゴーン社長を招いての国際講演会の模様

目 次

リサーチコスモ

現象論と分子論に立脚する分離科学の
確立を目指して…………… 2

Titech Now

学術国際情報センターの新設…………… 3

シリーズ 国際化を目指して

日産ゴーン社長の国際講演会開く…………… 4

ケンブリッジ大学チャーチルコレッジとの

交流協定…………… 5

海外ニュース

フランス・ボルドー大学にて…………… 6

ティータイム

明治・3人の蔵前OB—最初の民間平炉・

日本鋳鋼所の創設…………… 7

学内ニュース

島岡達三陶芸作品特別展・記念講演会開催 …… 8

新入生セミナー…………… 9

シリーズ 青春讃歌

スキー部…………… 16

人事異動…………… 17

謹告…………… 18

リサーチコスモ

現象論と分子論に立脚する分離科学の確立を目指して

岡田 哲男

1. はじめに

物質を扱う分野では多かれ少なかれ物質を分離する必要にせまられる。しかし、日常的に用いられる分離手法は既に確立されており、既存の方法を少し修正すればそれで十分であると考えられていることが多い。したがって、分離は既に出来上がっており、そこには未解明のことはあまりなく、新しい科学は出てこないと認識されているかもしれない。ところで、「分離科学」という分野が存在する。この分野の研究の主流は、特定の試料中に含まれる特定の対象物質群の分離である。複雑な構造をもち、人類にとって有用な生体関連物質や薬物などをうまく分離した結果に興味の大半がある。つまり、分離結果の良し悪しに研究の重心があり、現象論の追求に偏向しがちである。その反面、分離の本質を極めるといふ姿勢が極めて希薄であるように思える。このように、「分離科学」とはその分野に属するものにとっては物質分離のパフォーマンスを競う場であり、外部者にとっては便利な道具の供給源にすぎない。

一方、近年界面に関する研究、特に構造的によく規制され、よくキャラクタライズされた界面を用いる研究が盛んに行われている。界面へのアプローチは様々である。光、電気などをプローブとして、様々な工夫によって界面の現象がとらえられるようになってきた。特に、レーザーの進歩に伴う分光学的なアプローチの発展には著しいものがある。このような研究の多くは、組織化され、制御された界面という空間を分子計測の場として扱い、そこでの分子の情報を得ることを目的としている。しかし、とらえることができる分子には特殊なものも多く、また結果の解釈が常に客観性を保っているとは言い難い。

2. 界面つながり

物質分離の多くは界面で起きる。古くから用いられている溶媒抽出分離は液液界面で起き、クロマトグラフィーの分離は固液界面や気固界面で起きる。しかし、分離科学者が相を意識することはあっても、界面を意識することは希である。一方で、界面を計測場と位置付け、そこでの分子情報をとらえようとする研究が展開されている。この両者は明らかに

「界面」をキーワードとしてつながっており、共通する点や共有すべき問題意識が少なくない。しかし、両者の間にこれまで十分な関わりがあったとは言い難い。上述の通り、分離を扱う研究者は、分離を現象論的にとらえ、よりよい分離の達成を目的としている。そこでは、分離に関わる分子がどのように挙動したかはそれほど重要ではなく、概念的、直感的に結果を理解できれば十分であると考えられている。一方、界面に存在する分子に興味がある研究者は、彼（女）が用いようと考えているアプローチにとって都合がいいように系を設計し、研究対象分子を選ぶ。これらの分子のほとんどは、より複雑な分子を好む分離科学者の興味の対象になり得ない。このようにして、分離を追求する研究と分子を追求する研究に乖離が生じてきた。

3. 新しい分離科学の確立へ

筆者は、分離の現象論には多くの分子情報が含まれており、その大部分は他の方法からは知り得ないものであると考えている。たとえば、最先端の物質分離法を駆使すると、相互作用のエネルギーに10 Jmol⁻¹程度の差があれば、2つの物質を識別することが可能である。基本的な知識があれば、化学系の研究室でよく見かける一般的な装置を用いて1 kJmol⁻¹の差を識別することができる。はたして、この程度の小さな相互作用エネルギー差を他の方法で明確に、精度良く見分けることができるであろうか。残念なことに、今までの分離科学では分離結果のすばらしさだけが語られ、「物質分離はなぜ起きたのか」に関する貴重な分子情報は捨てられていた。

物質の分離は界面での非常に精密な分子情報を発信している。物質分離を情報発信源と位置付ければ、その結果に基づいて他のアプローチを用いる界面研究を設計し、分子論を展開することが可能である。それぞれを単独で用いたときに比べ、より明瞭で、信頼性の高い結果が得られるはずである。また、その先には分子論に立脚して分離の設計が可能になる時代が待っているに違いない。私達はこのような考えに基づき、様々な界面情報を発信してきた。そして、界面での静電的な相互作用や溶媒などに関して分子論的なアプローチとの摺り合わせに成功している。分離現象論を情報発信源と位置付け、界面での分子論の理解を促進するというスタンスは広く認知されたものではないが、近い将来新しい科学を切り開くアプローチになり得ると考えている。

(大学院理工学研究科化学専攻 教授)

Titech Now

学術国際情報センターの新設

学術国際情報センター長 藤原 英二

1. 特色ある情報センターを目指して

本学における情報基盤の充実と情報技術を活用した国際交流の促進を目指して、この4月より新たに学術国際情報センターが発足いたしました。このセンターは従来の総合情報処理センターと理工学国際交流センターを統合したものであり、情報技術を活用して研究・教育の支援を行い、またその成果を国内外の研究機関等に発信して研究・教育の交流・連携を深め、本学における研究・教育の活性化、国際交流の発展に寄与することを特色としています。本センターは、3部門、6分野からなり、専任教員12名、客員教員7名を有します。情報系は2部門からなり、『情報基盤部門』は、高信頼・超高速ネットワーク網の構築と各種通信網の統合化を目指す「情報流通分野」と、学内の研究、教育等に関する非定型な各種情報を統合し利用しやすい情報ベースシステムの構築をはかる「情報蓄積・活用分野」からなります。一方、『研究・教育基盤部門』は、次世代大規模高性能計算システムを構築し大規模計算を必要とする研究の支援を行う「問題解決支援環境分野」と、高速ネットワーク及びマルチメディアを使用した新しい教育環境を提供する「遠隔・マルチメディア教育分野」からなります。本センターでは、他大学の情報センターには存在しない特色ある部門として『学術国際交流部門』を設け、センターが有する情報基盤を最大限に活用して大規模な国際共同研究及び国際交流を行うことを特徴としており、これから新たな成果が期待できます。

2. 先端情報技術を維持したサービスの提供

本センターは学内共同利用の機関であり、情報基盤の利用及び国際交流事業の推進に関して、その支援業務を行う使命があります。一方、最近の情報技術の進展は極めて急速であり、これを利用したサービス形態も多彩となるなど、センターとして常に新しい情報技術を取り入れた業務サービスを心がけることが重要です。そのためには、日頃からセンター利用者からの要望に耳を傾け、将来を見すえた新規

情報サービスに応える技術及びシステムの研究・開発を行うことが重要です。すなわち、Needs Oriented な開発型研究の推進が重要であり、この観点から、本センターにおいては情報系に8名の専任教員、4名の客員教員を配置し、連携して効果的に研究・開発を進める体制としております。これにより、利用者の要望に対応したサービスの提供ができ、常に先端情報技術レベルを維持したセンターを目指すことができると考えております。

3. 情報技術を活用した国際交流の促進

最先端の情報技術を活用することにより、本学が従来より積極的に推進してきた国際交流をより一層促進することが可能となります。すなわち、高速なネットワークを介して、各種研究・教育情報の配信、スーパーコンピュータによる大規模計算パワーの利用、マルチメディア教材を使用した講義の配信、日本語教育の配信、国際交流情報の蓄積と利用、等の国際交流を進める上で有益な機能を提供できることとなります。将来的には、超高速ネットワークを介して本学におけると同等な研究・教育環境を海外の大学に配信するバーチャルキャンパス構想の実現が可能となり、新しい交流の創出が期待できます。

4. 国際共同研究と情報技術研究との相乗効果

大気環境変動予測、地球地殻変動予測、等を含む地球シミュレータ計画など、大型の国際共同研究の多くは、その精緻な結果を得るために桁違いの大規模な計算を必要とします。本センターでは、数名の専任教員と客員教員がこのようないくつかの国際共同研究を推進します。このとき、大規模計算を含む情報基盤を最大限に活用し情報系教員と密接に協力して研究を進める体制をとることにより、早期に優れた研究成果を上げ世界のリーダーシップをとることが望めます。一方、情報系教員にとっても具体的な問題解決に応える実用的なシステム構築への重要な示唆を得ることになり、両者の間に相互に影響しあって研究成果が上がる相乗効果が期待できます。

これからの理工系大学に求められる「新産業創出への貢献」「開かれた大学」などに応じていく上で、本センターの役割はますます重要となります。今後は、学内の「留学生センター」「教育工学開発センター」などとも連携して期待に応じていく必要があります。一層の御支援をお願いいたします。

(大学院情報理工学研究科計算工学専攻 教授)

シリーズ 国際化を目指して**日産ゴーン社長の国際講演会開く**留学生センター長 **大橋 裕二**

6月8日午後5時から6時30分まで、本学講堂で日産ゴーン社長を迎えて、本学主催の国際講演会「21世紀の企業のグローバル化に向けて—異文化の出会いと理解」が開かれた。国際講演会は21世紀の理工学の分野で先導的役割を果たすことを目指す本学の研究・教育を、世界的な視野で深めることを目的として行うものである。今回がその第1回目として、日産の奇跡的な復活を実現して、国内のみならず世界的にも注目されているゴーン社長の実像に迫りたいということで開かれたものである。

今回の講演会では本学では初めて参加希望をホームページによって受け付ける方式をとったことである。講演会の案内は学部1年生には化学実験の時間にビラの配付を依頼し、学部2, 3, 4年生には各学科長を通じてビラの配付を依頼した。大学院生には専攻主任に電子メールでビラと同じ案内を送り、専攻内の全院生に転送することを依頼した。この方式で実際に浸透するのか不安であったが、3日後には500名を超え、1週間で1000名を超えるという状況で、本学では完全にこの方式が定着した。講堂の収容人数から考えて、200名以上の申し込み者を断ることになったのが非常に残念であった。

講演は最初に内藤学長から歓迎の挨拶が行われた。引き続きゴーン社長が講演を始めたが、講演の冒頭で、日産で現在各部門の責任者として活躍している3名の本学の出身者が紹介された。本学に対する日産側の細かな気配りが感じられた。

講演の概要は、「日産リバイバルプラン(NRP)」の内容と、それを如何に実現してきたかという内容であった。まず日産低迷の原因を、収益管理の理念の欠如、顧客第一の視点の欠如、部門や地域別のセクショナリズムなどであると分析し、具体的な公約を示して、この公約を必ず実現することを徹底させた。そのために、物事の優先順位を明確にする、す

べてのプロセスに責任を明確にする、とくに結果責任をはっきりさせる、問題点を社員全員がチェックする、貢献度に応じて昇給、昇格を行う、などの具体的な方針を明快に説明した。最後に、当面の日産の経営方針を明らかにした。内容はかなり専門的ではあったが、素人でも充分理解できる明快な方針であるように思われた。筆者には社員一人一人のモチベーションが大切であると繰り返し強調したことが印象的であった。

その後、質疑応答が行われた。私たちの予想外に多くの質問が出されたので、限られた質問時間ではほんの一部であったが、それでも8つの質問を受けることができた。大学時代に得たことでその後に役立っていると思われることは何か、「ブランド」が意味するものは何か、日本とフランスの文化の違いはないか、自動車のデザインにおける「感性」とは何か、仕事と家庭の両立はどうするのか、「コストカッター」と言われていることについてどのように考えているか、広告を作るときの基本的考え方は何か、など非常に多様で難しい質問であったが、どの質問にも答えは全くよどみなかった。この中で特に印象的な答えはフランス人と日本人の考え方の違いを強調したところであった。フランス人は方針について議論するとすぐにその条件の中で最良の答えを探し出すが、実行段階になると予想外の結果で議論をやり直すことになり、なかなか実行できない。一方、日本人は議論ばかりしていてなかなか結論がでない。これはどのように実行するかまで考えて議論しているために結論がでないので、一度結論が出れば実行は非常にスムーズに行われる。このように日本とフランスの文化の良いものを組み合わせれば世界で最強の方針が実現できるのではないかと強調した点である。大学時代にもっとやっておけば良かったことは何かと聞かれて、英語をもっとやっておけば良かったと少しはにかんで答えたのには共感を覚えた。

ゴーン社長はどの質問にも簡潔に答えると同時に巧みに自らの主張を織り込んでいて、その話術に感心しているうちに予定の時間になってしまった。最後に、内藤学長から感謝文が彫り込まれた記念の盾が贈られた。満員の会場であったが、途中退場者も

ほとんどなく、最後まで熱心に質問し、熱心に聞き入っている参加者の態度に筆者は深く感動した。

この講演会が成功したのは留学生センターの廣瀬教授が中心となった周到な企画と、ホームページ受け付けを担当した小島助教授をはじめ留学生センター教官の皆さんと渡邊課長始め留学生課の皆さんの努力のお陰である。また会場でマイクの手配やイヤホンの回収などが円滑に行えたのは植草助教授を始め筆者の研究室の学生諸君の協力の結果である。この方々の献身的な努力に心から感謝します。

(大学院理工学研究科物質科学専攻 教授)

ケンブリッジ大学チャーチルコレッジとの 交流協定

小田 俊理

本年3月19日に英国ケンブリッジ大学チャーチルコレッジにおいて本学との交流協定調印式が行われ、相澤副学長と Sir John Boyd 学長との間で協定書が交わされた。チャーチルコレッジはケンブリッジ大学に31あるコレッジの中では新しい方で、1960年に Sir Winston Churchill を記念して設立された。理工系に重点を置いており、学生、教官の70%を占めている。

協定の相手が何故チャーチルコレッジなのかという問いに答える前に、ケンブリッジ大学におけるコレッジシステムについて簡単に説明しておこう。ケンブリッジ大学（とオックスフォード大学）では、コレッジと専門コース（法学、経済、自然科学、工学などの学部）とは縦糸と横糸のような関係で、学生・教官は必ずどれかのコレッジと専門コースに所属している。各コレッジは独立した自治体で、ケンブリッジの学生にとって、教育と生活の中心である。学生はコレッジの寮に住み、食事をして、少人数のチュートリアル教育を受け、スポーツや音楽などの課外活動を行う。ケンブリッジ大学への学生の入学は各コレッジ毎に選定を行う。

小田は10年前から科研費国際学術研究の支援によりケンブリッジ大学工学部 Milne 教授（チャーチル

コレッジフェロー）らとの国際共同研究を行い、両大学の交流協定への道を模索してきた。当時、ケンブリッジ大学工学部長でチャーチルコレッジ学長を兼務していた Broers 教授に相談したところ、交流協定を締結する主体はコレッジが適当であるとの回答を得た。その後、Broers 教授が、ケンブリッジ大学総長（Vice Chancellor）に就任した後チャーチルコレッジ学長に就任した Sir John Boyd は、元駐日大使であり大変な親日家である。彼の邸宅には益子焼や備前焼のコレクションが多く、東工大は多くの有名な陶芸家を輩出しているという話をしたら大変興味を持っていた。

チャーチルコレッジと東工大教官との関係は深い。木村孟名誉教授、日下部治教授、松村正清名誉教授、八木克道名誉教授、山本直紀助教らは、チャーチルコレッジに滞在、または研究者を受け入れている。

交流協定の内容は、教官・大学院生の研究交流である。学生の単位相互認定などについては、期末試験は年に1回しか行わないことや留年を一切認めないというケンブリッジ大学独特の現在の制度では容易ではなさそうだ。

チャーチルコレッジとの交流に実績が上がれば、次のステップにはケンブリッジ大学全体との交流協定に発展させたい。しかし、その場合ケンブリッジ大学の半数を占める文科系の研究者・学生をどうするかという問題が残る。四大学連合憲章がこれを解決するのではないかと期待している。



チャーチルコレッジにおける調印式を終えて
前左列から、Sir John Boyd 学長、相澤副学長、小田

(量子効果エレクトロニクス研究センター 教授)

海外ニュース

フランス・ボルドー大学にて

杉山 賢次

1. はじめに

1998年10月から1年間、フランス・ボルドー大学にポスドクとして滞在した。ヴァンテージ・ワインで有名なこの街は、古くからアキテーヌ地方の中心地として栄えてきた。今でも数百年前に建てられた教会を中心に、新旧の建物が町並みをつくり独特の雰囲気醸し出している。初めての海外生活、しかも不得意なフランス語での生活に戸惑うことも多かったが、研究のみならず私生活においても大きな収穫が得られたと思う。ここでは、フランスならではの研究室の様子を紹介したい。

2. キャンパス

ボルドー大学はヨーロッパ随一の規模を誇る総合大学で、文科系キャンパスはボルドー市内、理科系は隣のタランス市に位置している。最近建てられたばかりの理科系キャンパスの敷地は広大(245ha)で、大岡山キャンパスの10倍の面積である。広々とした緑の中に建物が点在し、自然に囲まれたすばらしい研究環境である。ただし、田舎の一本道を多くの車・バスが通るため朝夕の渋滞は避けられない。また、本音を言えば、ボールペン1本買うのにも2km先の購買所まで行かなければならず、学食は近くにあっても11時~14時しか開いてない、コンビニも本屋もレストランもない状況は、東工大での生活がいかに便利で贅沢なものかを再認識させてくれた。

3. 研究室の一日

一日の生活は挨拶に始まる。朝7時半に建物の鍵が開き、研究室に人が集まる。ここで、朝の挨拶が始まる。たいていは声をかけるだけだが、人によっては、一人ずつ握手(女性には頬キス)をするので時間がかかる。しかも、すでに挨拶をすませた相手にもう一度挨拶すると、たいていは不機嫌な顔を今朝会ったはずだと言われる。誰に挨拶したかを全部覚えておくのはとても無理だと思うが、後で述べるように、異なる文化圏の人たちが集まった時お互いの関係をスムーズに保つためにも、挨拶は大切なことである。その後、一仕事して11時半から1時まで昼食(自宅に戻る人も多い)。学食はメインディッシュに付け合わせ3品、パン食べ放題で300円と格安。付け合わせは惣菜の他にヨーグルトやチョコレートムースも選べるのがちょっとうれしい。4

時頃廊下の隅にあるコーヒーコーナーで休憩しながら世間話。6時半頃から帰宅が始まり、7時半には建物の鍵が閉まる。帰りの挨拶は、なぜか朝とは違って簡単な一言のみ。専門が高分子合成化学のため、反応によっては夜間に実験を行いたいこともよくある。しかし、反応装置を終夜運転することは許されていたが、夜間の滞在は一切禁止されていた。限られた時間の中で効率よく実験を進めなければならぬため、試薬や器具の位置を覚え、慣れるまでは苦勞させられた。

4. 研究室での会話

私の所属した研究所には、教授4名、講師1名、助手・技官各2名、博士課程の学生約40名が所属していた。東工大と大きく異なるのは、半分が女性であること。学生はもちろん、5名いるラボ責任者(助手や技官)の2人が女性であった。女性の社会進出率はEU諸国でフランスが最も高いそうだ。また、ポスドクは様々な国から集まってきていた。覚えていてだけでも、ドイツ、ベルギー、インド、アメリカ、インドネシア、メキシコ、トルコ、モロッコ、パリ(ボルドーの人に言わせるとパリはフランスではないそうだ)、そして日本。母国語のイントネーションが入った英語にフランス語が混ざり合った奇妙な会話が繰り広げられていた。研究室での会話で一番多かったのは、週末や連休の過ごし方であった。月曜日と金曜日は、先週末に何をしたのか、楽しく過ごしたのか、今週末はどこかへ行く予定があるのかといったことで一日中盛り上がっていた。クリスマス休暇の直前は、そわそわし始めて実験どころではない人もいたのは御愛敬か。それにしても、ボルドーの人たちはよく喋る。言いたいことはすべて話すし、聞く方もすべて聞いてから反論する。双方が納得するまでは、どんな些細なこともうやむやにしない。研究室のみならず、町中のあちらこちらでよく見られる光景であった。しかも、どんなに言い合いをした相手にも、翌日は笑顔で挨拶できるのは感心するばかりであった。

5. おわりに

信号待ちで後ろから追突されたり、車がレッカー移動されたりと、私生活でも様々な体験をしたが、あっという間に過ぎ去った1年であった。帰国して1年が過ぎ、留学中感じたことや経験したことをこれからの研究生活に少しでも生かせるように思っている。最後に、留学を快く認めてくださった平尾教授、石曾根助教授をはじめ、留学中お世話になった方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

(大学院理工学研究科有機・高分子物質専攻 助手)

ティータイム

明治・3人の蔵前OB

—最初の民間平炉・日本鑄鋼所の創設—

名誉教授 山崎 升

明治32年(1899)ベルギー国アントワープ港を解纜した日本郵船常陸丸の甲板に奇妙な日本人が2名乗っていた。いくつかの大型機械類を積み込んだ荷主には無償で船室が提供されるのが一般であるが、彼等はこれを断り低料金のデッキパッセンジャー(甲板で寝起きする)にまじり約60日の日本への航海をはじめた。

この2名は蔵前職工学校(当時職工は技師の意)の第2回(明20, 1887)及び第5回機械工芸部(機械科)を卒業した山崎久太郎と羽室庸之助で、選ばれて明治30年官営八幡製鉄所(現新日鉄)の建設のため農商務省より製鉄技術習得の目的で他の5名とともにドイツに派遣されていた。

当時ヨーロッパは産業革命後の隆盛期で、製鉄から車輛、武器などをつくる鑄鋼の時代に入っていた。1889年パリ万国博覧会におけるエッフェル塔はまさに鉄の建造物の象徴であり、1900年のパリ万国時にははじめて地下鉄が開通した。

このような状況を見た両名は与えられた製鉄用ロール技術の研究テーマを放棄し、専ら鑄鋼技術研究に従事することを誓い合ってゲーテホフnung製鉄所の鑄鋼の現場に入り、これを実行した。

2年間安下宿でじゃがいもを食べながら貯めた金でできるだけ機械を買い集めて上記の船に積み込んだのである。帰国後命に反して鑄鋼の研究をした事情を述べ、農商務大臣に引き続き鑄鋼の試験に従事したい旨嘆願したが入れられず、両名とも休職を命じられた。

背水の陣を敷いた彼等を支援したのが蔵前の恩師平賀義美先生(当時大阪商品陳列所長・住友家囑託)で、氏の斡旋により河上謹一(住友理事)、片岡尚輝、浅村三郎(明19, 第1回機械工芸学部卒業、我が国最初の特許事務所創設者、現浅村内外特許事務所)らから3万円余の出資を得、日本鑄鋼所が大阪府伝法村に設立された(明32・9月, 1899)。

片岡所長、山崎技師長、羽室技師ら職員8名、工員24名は小型シーメンス式平炉(3t半)、ドーソン式ガス発生炉各1基を備えた工場を建設し、翌33

年3月点火試験を行った。我が国最初の民間平炉である(写真)*。工場建設、試運転などは徹夜の連続でその苦労は筆舌につくし難いものであったと聞く。

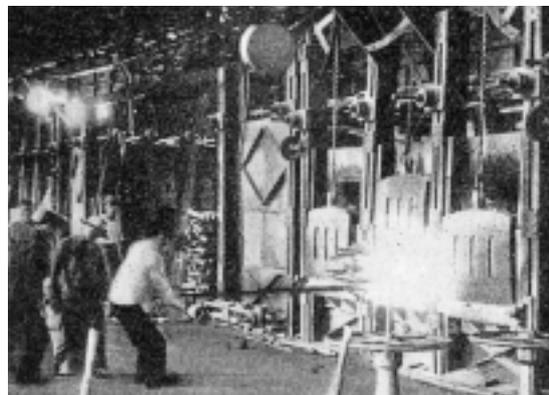
紙面の都合で詳細は省略するが、技術未熟のため所期の製品が容易に出来ず、会社は巨額の損失を出し、そのうえ折からの金融恐慌の影響を蒙り住友家に営業を譲渡することになった(明34・6月)。住友家はこれより先明治21年別子銅山に製錬所、同30年大阪伸銅所をつくり、製鉄事業への関心も深く、住友鑄鋼所として上記事業を引き継いだ。山崎工場長ら職員20名、工員160名とともに新会社に移り、以後設備を拡張し明治35年末に平炉2基、年産2,000tの製鋼、日産6tの鑄造能力をもつようになった。日露戦争(明37~38)のはじまる直前のことである。のち同所は昭和10年伸銅所と合併し住友金属工業(株)となる。

明治時代蔵前の学生はその意気軒昂「本郷(東大)何するものぞ」と東京の町を闊歩していた。上記兩名の一步でも速く欧米先進国に追い付くために自己の生活も犠牲にするのみならず、場合によっては上司の命に従わず、そして認められなければ独立して事業をおこすなど、まさに蔵前精神躍如たるものがある。また真摯な事業欲に恩師、同窓の強力な援助があつて成功したのである。

折しも本学は本年5月に創立120周年を迎えたが、本文が日本の高度工業社会への発展へ貢献された多くの蔵前OBを思い起こすすがとなれば幸いである。

参考文献：日本鑄鋼所創業史、住友金属工業(株)60周年小史、日本近代製鉄技術発達史、浅村内外特許事務所資料。

*註 これまでも陸海軍の造兵廠などで外国技術も導入し試みられていたがすべて失敗に終わっていた。写真は住友金属工業60周年小史より転載。



我が国最初の鑄鋼用民間平炉(大阪府伝法村)

学内ニュース

島岡達三陶芸作品特別展・記念講演会開催

(平成13年6月19日から21日)

百年記念館では、1941年に本学窯業学科を卒業以来、創造的な民芸陶器を制作し続け、1996年に国の重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された島岡達三氏の陶芸作品の特別展を6月19日から21日の3日間開催した。

島岡氏の陶芸展は、国内はもとより世界各地で開催され、高い賞賛を得ているが、今回の特別展は、昨年、本学卒業生の中澤三知彦氏から寄贈され百年記念館が所蔵する島岡氏の作品約110点を中心に、島岡氏御自身から寄贈された作品も含めて、氏35歳の初窯以来81歳の最新作に至るまでの50年に及ぶ作品を一堂に展観するという、滅多に無い作品展ということで、学長表敬訪問で本学を訪れていた、タイ王国チュラロンコン大学長をはじめ3日間で約1000名の入場者を迎えた。

また、特別展は、このほか百年記念館の所蔵する、本学教員であったG.ワグネル氏（旭焼）、板谷波山氏（マジョリカ）及び、卒業生の河井寛次郎・濱田庄司（民芸陶器）・辻常陸（有田焼）・加藤鈔（瀬戸焼）・村田浩（益子焼）ら著名な陶芸家諸氏の作品も展示し、また現在の無機材料工学科における先端セラミックス研究の一端の紹介もした。

なお、開催初日には、島岡氏御自身並びに同氏の作品に造詣の深い水尾比呂志先生（元武蔵野美術大学学長）による記念講演を開催。当初の予定人員をはるかに超える聴講者があつまり、また、本学卒業生で、2000年ノーベル化学賞を受賞された白川英樹博士御夫妻も多忙な日程の中、来場されるなど華やかな講演会となった。

(研究協力部研究協力課)



左より中澤三知彦氏、内藤学長、タイ王国チュラロンコン大学長、細川研究協力部長



白川英樹博士御夫妻



島岡達三氏



講演中の島岡達三氏

<新入生セミナー>

1 類新入生セミナー

1 類主任 **海津 洋行**



1 類の新入生セミナー・オリエンテーションは2日間にわたって行われた。4月6日(金)10時から14時10分まで、各学科の紹介が行われた。14時20分から17時10分まで、2回に分けて、各学科の研究室紹介が行われた。この間、昼食時間を利用して、各クラスに分かれて、親睦会がもたれた。翌週4月9日(月)には、化学科の研究室紹介と地球惑星科学科の体験実験が行われた。

1. 学科紹介または講演会

各学科35分の持ち時間で学科紹介または講演をしていただいた。志賀徳造教授(数学)は「数学が目指すもの」と題し、懸賞の懸かっている問題等を例に挙げて、数学のおもしろさと、最後には社会との関わりにも及ぶお話をされ、数学科の紹介をされた。河合誠之教授(物理)は「宇宙物理学への誘い」と題し、X線天文学、宇宙物理学がいかに魅力あるものであるかを、御自身の研究を通して講演され、物理学の現状の一端を紹介された。小國正晴教授は「化学は夢物質へのナノスケール案内人」と題し、ナノスケールという見方から、化学に関する色々な例を挙げて化学の領域について話をされ、化学科の学科紹介をされた。渡辺治教授は「情報を科学するって?」と題し、情報とは何かについて、ユニークな問答形式でお話をされ、最終的に情報学とは何かについて説明され、情報科学科の紹介をされた。最後に「地球惑星科学のフロンティア」と題し、修士学生と研究員の二人が、自身の体験をまじえた学生時代の様子と、現在行っている研究を紹介し、地球

惑星科学科の紹介をされた。

昨年同様本年度も、各学科ともよく工夫されており、新入生は熱心に各先生方の話に耳を傾けていた。この学科紹介が学生諸君の知的好奇心を刺激し、今後の勉学の一助となってくれることを希望したい。

2. 親睦会

8クラスに分かれて、クラス担当の先生方と一緒に弁当を食べながら懇談を行った。天気が良かったので、教室の外で食事をしながら親睦を図ったクラスもあった。

3. 各学科研究室紹介

4月6日各学科の紹介が終わってから、2ラウンドに分けて研究室紹介が行われた。学科紹介の後移動のための時間を10分ほどとったので、混乱はほとんど見られなかったが、教室が見つけれない学生もいたので、教室までの案内を詳しくする必要があろう。4月9日は地球惑星科学科は午前9時から午前11時20分まで体験実験を、化学科は午前10時から1時間、研究室紹介大会を企画された。各学科共工夫が凝らされ、また教官ばかりでなく、大学院生、卒論生等も参加して雰囲気を和やかにしていた。新入生にとって、大学ではどのような研究を、どのようなところで、どのように、行っているのかを知る良い機会になったものと思われる。

4. まとめ

今年度の1類新入生セミナー・オリエンテーションは1日目の学科紹介の後に、研究室紹介を行った。これは昨年1日目に学科紹介、2日目の9時から研究室紹介を行ったが、2日目は遅刻者が多かったため変更したものである。2日目は希望する学科が特別企画を行った。1日目の研究室紹介には多くの新入生が参加したが、2日目の出席者は少なかった。特別企画については、もう少し詳しく情報を知らせる必要があったと反省している、と同時に、新入生諸君には何でも見てやろうという好奇心を発揮してもらいたかったと残念に思う。しかし、総体的に、本年度の1類オリエンテーションは成功であった。この日のために準備していただいた事務の方をはじめ、各学科の関係者の多くの方々に深く感謝します。

なお、新入生諸君には、何かあればすぐにクラス担任あるいは主任に気軽に相談していただきたい。諸君が有意義な学生生活を送るために。

(大学院理工学研究科化学専攻 教授)

2類 一泊二日バスゼミ

2類主任 橋本 壽正

1. さあ出発

バスゼミが始まって以来一貫して、2類は箱根・湯河原方面の一泊二日で実施されてきた。ときに、新生はもう一人前なのだから、もっと簡素化してはと言う声がないこともなかった。そのたびに効果ありという結論・続投であった。人数が少ないこと、出だしは大切であるという先生方の認識も根底にあった。この継続性は、なによりも携わってこられた多くの教職員の御尽力の賜である。今年の結論を先に言うと、バスゼミ実施後に行ったアンケートでは、あの小泉内閣の支持率を越える支持で、入学早々に友達が出来て安心したというのが大方の回答であった。当日の朝9時には、参加者93名と11人の教職員が遅刻もなく本館前の噴水に揃い、3台のバスを連ねて満開な桜の大岡山キャンパスを出発した。このときは新生にとって、期待と不安の出発であったに違いない。

2. 1日目

東名高速道路に乗る頃には、自己紹介もたけなわで、もう和やかな雰囲気は充満して、あっという間に、小田原にある神奈川県立生命の星・地球博物館へ着いた。少し早いのが、昼食組と見学組に分かれ、しばし歓談と見学をする。宿舎である湯河原厚生年金会館には、予定より早く着き、教官と学科の紹介があった後、早速先輩の講演会に入った。最初は「先端産業を支えるセラミックス」と題し、山川孝宏さん（太平洋セメント(株)中央研究所）が、研究者としての心構え、学生時代と社会に出たあとのことなど、いろいろな角度から、御講演いただいた。ついで、「材料を勉強して電機メーカーで働けるのか？」と題した、大村幸生さん（ソニー(株)モニターCRT事業部）の講演では、TVディスプレイの製作過程をわかりやすく説明され、卒業して間もない若い大村さんのキャラクターもあって学生達も楽しく聞いていたようだ。

午後の講演終了後は、夕食を挟んで自由時間とし、各部屋での語り合いを通じて、大いに親しくなった

と思う。夜の講演は、すっかりリラックスしていることもあって、少し学術講演から離れて、作曲家河野土洋さんに音楽と材料について語っていただくという予定を立ててあった。河野さんは、2類出身のプロの作編曲家である。バイオリンと材料の話、御自身の作品の紹介や、作曲法など、バイオリン演奏やコンピュータを駆使した大変楽しいお話をいただいた。引き続いて、あちこちで車座になって懇親会を開き、皆さん夜が更けるのも忘れて盛り上がり、一層懇親を深めていたようである。

3. 2日目

朝から材料セミナーと銘打って、検討及び発表会を実施した。その場でランダムに9班に分かれ、身近なもの（使い捨てカイロ、カメラなど）を分解しながら、使われている材料と利用されている性質、あるいは構造の工夫点等を調べた。先生たちも各班の特別顧問としてアドバイスをしていたが、結構手こずっていたようだ。最後に各班で、OHPを使った発表があり、学生同士で活発な討論が展開された。チームワークも非常によく、発表もなかなか工夫され、OHPの使い方にも感心させられた。最後に、各班の相互投票によって、最優秀賞と優秀賞が選定され、ささやかながら賞品が手渡された。

大学に戻る帰りのバスでは、ほとんどの学生が眠っていた。大岡山キャンパスでは、土曜日ということもあって、バスが入れないほどの花見客で埋まっていた。花見に闖入してきた大型バスを皆が不思議そうに見上げていた。これからの時代を背負ってたつ若人の出発を祝福してくれているように思えた。（大学院理工学研究科有機・高分子物質専攻 教授）



2日目の材料セミナーの風景

闊達で、凜としていて、頼もしい

3類主任 渡邊 順次



類主任というのは、なかなか巡り合わせのないことだと思い、入学式から新生達と共にしてみた。このような純真、無垢な場に参席するのも、私自信の入学式以来30数年ぶりであった。壇上の大きな校旗がやけに戦闘的に見えたが、儀式はやはり儀式、必要であると感じ入った。

“逝くものは斯くのごときか・・・” 不思議と新鮮に歌え、また来賓の方々、学長のお話にも素直に耳を傾けることができた。そればかりか、“異端の寛容”にあこがれ入学を果たした当時の自分をいとおしく思い出し、老いた自分との空隙を埋める数奇な時代を反芻するに十分な時間があった。期待と不安が錯綜してしまうが、新生達には、ただただがんばっていただきたいと祈るばかりである。

例年通り、3類では、入学式翌日の4月6日(金)に終日の歓迎行事を企画し、

- ・類オリエンテーション
(W521講義室：9:00~10:00)
- ・新生セミナー(三溪園、日石三菱精製(株)根岸製油所見学：10:00~18:00)
- ・新生歓迎会(ケータリング食堂：18:00~19:30)

を開催した。類オリエンテーションでは、前日の余韻を引きずって、3類の学科案内を熱く語った。何にもまして、“ノーベル賞を受賞した白川英樹博士は、3類の前進である化学工学課程の卒業生であり、君たちに直結する大先輩である”と、この一言で3類の伝統ある歴史が語れたのは、本年度の類主任、冥利に尽きる。白川先生ありがとう。

1時間ほどの短い旅程であったが、バスの中での雑談は場をくつろがせる。学生諸君の自己紹介、クラス担任、助言教官の紹介、そして先生方による学科紹介など和気藹々と進行し、会話が弾む。第一目

的地である三溪園に到着する頃には、もうすでにグループの輪が出来上がっていた。暖かい日であった。折しも、庭園は見事に桜華でうめつくされ、心地よい春風がそのかすかなにおいを運んでいた。

企画通りの風景であった。内藤学長ならずとも、感傷にふけり一句詠み上げたくなるだろうと。しかし図らずも、学生達は、ただワイワイ、ガヤガヤと無邪気に騒いでいただけであった。

三溪園から日石三菱(株)の根岸製油所までは10分ほどの行程であった。150名を収容できる大会議場で昼食を取り、その間ビデオで会社案内をしていただいた。昼食後しばしの休憩を取り、ガソリン、潤滑油供給グループとしてF1レースに直接参加された技術者、水素燃料電池の開発を進めている研究者からそれぞれの苦労話と成果に関する講演をしていただいた。特に後者は、環境と直結した問題であり、学生たちから忌憚のない質問が相次ぎ、環境問題への関心の高さを伺い知ることができた。

その後二組に分かれ、製油所の見学をさせていただいた。原油の搬入口から、最終製品の搬出口まで、俗に言う油臭さを感じることもなく、完膚無きまでに合理化された生産ライン。我々が化学工業を支えてきたのだという威風堂々とした自負を見せつける。見事としか言うより他にない。横浜球場ほどの石油備蓄タンク、100万トン級の大型タンカー、そしてそれを直接横付けできる巨大栈橋、おそらく日常では身近に接することのない風景が新鮮に目に飛び込む。バスでの30分の行程であったが、短く感じた。

そして最後に、“石油を中心としたエネルギー”と題し、燃料問題の切実さを訴えるとともに、その打開に向けた企業の取り組みについて講演をしていただいた。将来その多くが石化工業にかかわることになるであろう学生達は、資源枯渇、エントロピーという名の環境破壊、この二つの難題に技術者、研究者として確かに立ち向かわなければならない。身にしみて実感していただければ、この企画をしたものにとっては本望である。

会社の方々に厚くお礼をし、大岡山へと帰路を急いだ。魔の渋滞地帯であることを懸念し、早めに出たのが幸いしたのか、順調に復路をこなし、疲れもなく歓迎パーティになだれ込んだ。すでに30名ほどの先生方が待ち受け、歓迎パーティはいつとはなく自然と始まった。先生方の歓迎、激励の甲高い言葉が飛び交う中、パーティは進行し、学生達の大きな輪が先生を取り巻くという歓談スタイルがあちこち

に見られた。とにかく学生達は、闊達で、凛としていて、頼もしい。

“飛び来る子、抱きあげる輩がおりて、学は成す”若者には有り余る知力と体力がある。ただ、その使い方を知らないだけである。われわれ熟した老輩がそれを教えよう。

バスセミナーの企画立案に労をとっていただいた日石三菱(株)の方々、また雑多な事務処理をしていただいた事務官の方々に、学生、教官共々厚く御礼申し上げます。

(大学院理工学研究科有機・高分子物質専攻 教授)

4 類の新入生セミナー

4 類主任 恩澤 忠男

本年の4 類新入生セミナーは、4 月6日金曜日から3 日間にわたって行われた。初日午前中は担当教官の自己紹介、特別講演、午後はロボットゲームの説明に引き続き、ロボット製作の開始、2 日目は全日ロボット製作、3 日目は競技会というスケジュールで行われた。

1. 全体講義

特別講演は本学の先輩である JR 東日本副社長の石田義雄氏にお願いした。氏の話は、氏の経歴を含め、指揮者の朝比奈隆氏や堺谷太一氏などのエッセイを元に人生訓について講演があった。新入生にとってのこれからの人生観の一助になる話で、教官にとっても非常に興味あるものであった。ただ、教室が狭かったのか、教官は立って聞いている人が多く類主任として申し訳なく思った。

午後の全体講義は広瀬教授から、これから行なうロボットコンテストの方法と共にロボットについての話があった。



2. ロボットコンテスト

ロボットコンテストの内容は、一人ずつロボット製作用の基本セットに、割り箸や段ボールなどいろいろなものを用いて、オリジナルのロボットをつくり、最終日の競技会で4 人1 チームが協力してロボットを操縦し、フィールドに散らばったオレンジ色のピンポン玉と白色のピンポン玉を集めてシュートゾーンに運び込み、その合計得点で競い合うという方法である。

初日の全体講義が終了した後、4 クラスに分かれ、さらに4 人一組となってロボットの製作に入った。各チームは名簿順で分けられたため、ほとんどの学生が互いに初対面であるが、この3 日間で最も親しい友人の一人となったであろう。

今年はロボット製作の段階で、指導してくれた先輩の学生が製作ロボット例など見本となるものを一切見せなかったため、各チームの学生が知恵を集結して製作に望み、非常にユニークなロボットが多数製作された。確かに、ピンポン玉を集めるロボット、それを運ぶロボット、シュートゾーン（これは100 円ショップで購入したふた付きの入れ物など）のふたを開けるロボットと、よく考えられた作品が多く製作された。

予選会では非常に高得点を上げたロボットも、決勝戦ではうまく動かなくなったり、爆笑と共に大慌ての学生など、新入生や教官また補佐してくれた学生らも大いに楽しんだ。競技会終了後、豪華な景品の出る表彰式に続き、懇親会を行い、学生と教官、学生同士の親交を深めた。

3. 終わりに

ここ数年4 類の新入生セミナーでは、同じロボットコンテストを行っているが、毎年お世話をしていただいている広瀬教授、米田助教授また手伝ってくれた学生そして今年度のクラス担任、助言教官の各先生方に深甚なる謝意を表します。

(大学院理工学研究科機械制御システム専攻 教授)



サロンで新入生セミナー・・・5類の場合

5類主任 阿部 正紀

1. ボランティア学生大活躍

“5類バスゼミ一行”の大型バス7台は、4月6日(金)午前9時30分、図書館前を出発。立案から実施にいたるすべてをとりしきる学生ボランティアスタッフ(学部生17名)に引率され、新入生228名(欠席者は6名、全員留学生)、教官スタッフ10名、補助スタッフ(大学院生)4名、計259名が参加。

青空と富士山を映す芦の湖畔のレストランで昼食をとりながら開会式(挨拶と総論)の後、箱根湯本ホテルに到着。箱根湯本駅から車で3分の至近距離とはいえ、湯本茶屋の位置する峠の急斜面に建てられたホテルは窈窕(ようちょう)として静寂の世界。

2. 国際会議風?

メインイベント「先生講演会」と「学生講演会」の始まりは午後3時。シャンデリア輝く披露宴会場でもある会議室で進行する5平行セッションは、さながら国際会議の雰囲気。先生方は御自分の研究の自慢話に花を咲かせつつ学科紹介。学生講演会は教官オフリミット。門外不出の資料(きびしい各授業科目評価も書かれているらしい?!)をもとに、単位のとり方や学生生活のすべてを tutorial。サロンの一角では「学生相談室」が同時併設。スタ

ッフのお兄さんお姉さんが新入生を指南する様子は publication room のおもむき。

300畳敷の大広間に5類一家が勢ぞろいして、夕食の後は懇親会。芸達者な学生スタッフのリードで大爆笑のゲームで盛上った後、スタッフ全員のあいさつ。「君も来年はスタッフになってほしい」と各スタッフがアピール。手ごたえがありそうだ。来年もまたやろう!

翌朝は午前9時から、また5平行セッション+学生相談室。内容は同じだが、聴衆は入れ代っている。同じ釜の飯を食って、ぐっと親近感が深まり、スピーカーは熱っぽく蘊蓄をかたむける。昼食の後、記念撮影をして一路、大岡山へ。

3. バスゼミの意義

例年と同じく、今年もボランティアによる手造りの5類バスゼミに対する参加新入生の支持率のアンケート調査結果は高かった。福祉、環境保護、行政参加とボランティア活動が盛んな時勢にマッチしているのか。また人間よりもマウスとつきあう時間が長い若人にとって、一時嫌われたグループ旅行が見直されたのだろうか。ともあれ、バスゼミの存在意義は時代とともに変革をとげたようだ。

おわりに今回の5類新入生セミナーに御参加・御協力いただいたすべての方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

(大学院理工学研究科電子物理工学専攻 教授)



学生相談室風景



夕食風景



「先生講演会」で携帯電話からの電波発射をデモンストレーションする廣川助教授



「学生講演会」で熱弁ふるう講師



グループごとに記念撮影(箱根湯本ホテルの庭で)

新入生バスゼミに思う

6類主任 **肥田野 登**

6類は、例年どおり4月6日に類主任の挨拶、各学科長の学科紹介を行い、4月7日に簡単なオリエンテーションのあと、土木、建築、社会工学の各学科が企画した見学会を快晴のもと、1日かけて実施した。土木グループは、新日本製鐵君津製鐵所及び東京電力富津火力建設所、建築グループは、東京湾アクアライン、海ほたる、鴨川シーワールドで、それぞれ企業の代表者、設計者、施工者から説明を受けた。社会工学グループは、東京の明治都市計画の具体例である東京駅丸の内オフィス街、皇居及び行幸道路、日比谷公園を訪れ、さらに江戸東京博物館及び貨幣経済を支えているシステムの基本にある日本銀行の貨幣博物館を見学した。

参加いただいた先生方や院生諸君の努力により、おおむね学生の反応もよく、高校時代とは異なる、より専門的体験をさせるという効果は十分あったようだ。

しかし考えてみると、このバスゼミにも長い歴史があり、少し見直しをしても良い気がする。この点について貴重な紙面をお借りして私見を述べてみたい。

そもそも、このセミナーは大きくいえば1969年に大学紛争で講義が出来なくなり、それに対してとられた、寺子屋方式と言われる学生と教官が直接接する助言教官制度が発足したのに端を発していたのではないか。そして類別入試の実施以降、同様の趣旨を類で生かすということで始まったものといえよう。

私も入学当時、この助言教官制度のもとで2、3名の他の新入生とともに確かな化学関係の研究室のゼミに参加した記憶がある。英語の論文購読であったような気がするが論文のコピーをもらって翻訳し

た。どれほど専門的なものであったかどうかは、勿論素人でよくわからなかったが、なるほど大学とはこういうことを勉強・研究しているのか、という実感が湧いたのをよく覚えている。またその時、われわれ新入生の訳したところについて教室の方がいろいろコメントを下されたのも今思えば東工大の持つ大変な魅力のひとつである。すなわち教官と学生の距離がこのように近い大学は日本にはないのではないか。

さて翻って考えると、これほどまでに科学技術が細分化され、その一方で、他分野との融合が求められている現代において、むしろ新入生にとってほんとうに必要なのは、自分の専門でない他分野への理解、あるいはより深く、学問を行う喜びを知ることではないだろうか。

このように考えてみると、むしろ類別オリエンテーションは、類のセミナーにかえて、入学した類のオリエンテーションとともに、全くランダムに、学生をその類以外の類の研究室に割り当て、そこで半日、または1日所属し、ゼミなどに参加させてみたらどうであろうか。

入学した類についてはFゼミ等で1年次にも触れる機会は相当あるものの、多くの学生にとって他の類については入学以降全く触れる場はない。したがって、他の類をのぞかせることは新入生にとってもプラスではないだろうか。

新入生に焼きつくであろうこの光景こそが、受験勉強とは全く異なる新しい世界への誘いであり、かつ未知なるものから受ける衝撃である。4年になって卒研について初めて学習意欲が増す、という調査結果が最近工学部から出たようであるが、このような体験は学習意欲を1年次から向上させることにつながるといえないだろうか。ウイングの広い東工大での最先端の科学技術の原体験こそが、今世紀、世界に誇る新たな科学技術を切り拓くことにつながると考える次第である。

(大学院社会理工学研究科社会工学専攻 教授)

7類 新入生セミナー報告

7類主任 青野 力三

1. 長津田キャンパス顔見せ

4月6日、長津田キャンパス（現すずかけ台キャンパス）において7類新入生セミナーがおこなわれた。7類の1年生は、毎週木曜日に専門基礎の講義を長津田において受講する。3年次以降は、全ての講義が原則として長津田においておこなわれる。しかし、入学試験あるいは入学式の会場には長津田キャンパスは使われないため、7類の新入生はこの日になって初めて長津田キャンパスに登場する。7類新入生セミナーが長津田キャンパスにおいておこなわれるようになったのは、新入生に長津田キャンパスを紹介して早く慣れてもらうためである。

都心から田園都市線すずかけ台駅までの交通情報、及びすずかけ台駅から会場として用いた大学院管理共通棟（G4）2階大会議室までの地図は、入学式の際に各新入生に対して配布してある。少数の遅刻者はいたが、セミナー開始定刻10時までにはほぼ大勢が集合した。しかし、7類の新入生全員（165名）がゆったりと着席できる会場が長津田にないことは、講義など教育上大きな問題であると改めて感じた。

2. 学部教育そして研究

長津田において新入生セミナーをおこなう趣旨を類主任が説明した後、橋本弘信学部長から挨拶がなされた。前日におこなわれた入学式をふまえ、東京工業大学での学部教育の説明がされた。さらに、話は大学院での研究生生活にも及び、大学での教育、研究の一端を新入生たちが理解したことと期待された。

3. 21世紀の生化学

「大学は高校と同じく授業を受けるところである」という意識が、まだ多くの新入生にとっては一般的であったかもしれない。大学でおこなわれている学問、研究の一端を紹介するために、石川智久教授が学術講話をおこなった。題して、21世紀の生化学で

ある。学術講話は、宇宙そして地球誕生のスライドから始まった。時まさに、驚異的速度で進行しているDNA塩基配列の解読技術の進歩は、ヒトゲノム塩基配列の全容を明らかにすることに成功した。このような時期に生物を研究対象に持つ学部に入學することに遭遇した若者たちは何を指すべきか、石川智久教授の専門分野である創薬の例を引きながら、ゲノムとは何であるのか、どのような情報が得られるのか、熱弁を振るわれた。「研究活動はおもしろそうだな」と新入生が感じ、セミナーの後の勉学に熱意を維持して大学生活を送る気になるような講話をお願いしてあったが、多くの新入生が発奮してくれたものと思われる。

4. 懇談会での学生生活ガイダンス

午後は、6つのグループに分かれて昼食をとり、さらに懇談会をおこなった。懇談会には、クラス担任、助言教官の紹介を兼ねている。そして、多数の助手、大学院生の出席、協力を得ておこなった。諸先輩の話聞きながら大学生としての生活に実感を感じ、見通しを得たものと思われる。また、初めて出会った新入生同士も懇談会の後には親しく打ち解けあっているように見られた。このまま新入生相互の情報交換が発展していくことを期待する。

5. 2年次以降の学部教育

引き続き、2年進学時に所属する学科の簡単な説明をするために、新入生に対して類オリエンテーションをおこなった。そして、1年次の長津田での最初の講義としてF1ゼミの説明を4月12日におこなう旨の予告をした後、新入生セミナーを無事に終了した。

（大学院生命理工学研究科生命情報専攻 教授）



シリーズ 青春讃歌

スキー部

—大学生活における課外活動の意義—

競技スキー部主将 山田 祐介

早いものでスキー部に入部してもう4年目である。今はこうして主将などという身分になり、このような原稿を依頼されていると思うと感慨深いものがある。私の入部した理由は「高校の時スキー部だったから」と思いスキー部を見にいきそのままなんとなく入ってしまったというものだが、他の人はそうではない。ある者はオリンピックを見てジャンプを試してみたくなり、ある者は何か運動をしようと思いい、その「何か」が偶然スキーであったりと様々である。

最近では体育会系の運動部は流行らなくなってきている。特に我々スキー部はスキー競技者人口も減少し、お金もかかると言われ部員数も減ってきている。話を聞いてみると他校のスキー部も同様に厳しい現状に直面しているところが多い。たしかに春、夏、秋、としっかりバイトをして稼いでもそのお金はほとんどスキーにつきこまれてしまい、他の事にはあまり使えない。

さらにスキーというスポーツの性質上、冬休みと春休みのほとんどを自宅外ですごす。これは試合に勝つためにうまくなろうと最大限の努力をするので、かなり緊迫した合宿生活になり、普通に想像し

がちな「スキーを楽しむ」と異なるので中々大変である。

こう書いてしまうとスキー部に入った事を後悔しているのかと疑われてしまいそうだが、決してそんな事はない。むしろ満足している。これは他の部員たちも皆そうであると思う。なぜならそうした苦労や練習の成果が現れた時の喜び、努力が実らず不本意な結果に終わった時の悔しさ、実際の試合で感じたスキー競技の奥深さなどの全てがそれまでに費やした時間や労力、金額といったものを補ってあまりある得難いものであると思うからだ。特にこれほどの時間を有効にこうした事につき込めるのは学生の間だけなので、非常に有意義な学生生活をおくれていると思う。無論、こうした感覚は我々スキー部だけではなく、他の体育会系の部活や文科系の部活でも同様の感覚はあると思う。そのような感覚を課外活動だけではなく、自分のやる研究や社会に出てからの仕事にも得ていきたいものであり、またその思い出や情熱を自分の人生の糧として有意義なものとしていきたいと思う。



島岡達三特別展

- 先生の作 見る人に心地よい
 - 蔵前のよき伝統がここにあり
- イチローと佐々木
- アメリカの水にも両人よく適し



◆ 謹告



本学名誉教授 ^{かわしま} ^{いたる} 氏は、去る平成13年7月2日午前9時26分に逝去（享年66歳）されました。ここに深く哀悼の意を表し謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

同氏は、昭和39年北海道大学大学院文学研究科退学後、昭和51年本学助教授、昭和55年本学教授、平成7年に本学名誉教授となられ、現在に至っております。

専門は日本近現代文学



本学名誉教授 ^{ほま} ^{ひろし} 氏は、去る平成13年7月4日午前9時13分に逝去（享年74歳）されました。ここに深く哀悼の意を表し謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

同氏は、昭和26年東京大学法学部卒業後、昭和43年本学助教授、昭和47年本学教授、昭和62年に本学名誉教授となられ、現在に至っております。

専門はロシア文学

東京工大クロニクル No. 357

平成13年7月31日 東京工業大学広報センター発行©

センター長 相澤益男(副学長)

池田富樹(資源化学研究所教授)

岩本光正(大学院理工学研究科教授) 上田 充(大学院理工学研究科教授) 南 不二雄(大学院理工学研究科教授) 石川冬木(大学院生命理工学研究科教授)

尾関智二(大学院理工学研究科助教授) 中村健太郎(精密工学研究所助教授) 山崎 尚(総務部企画広報室事務官)

東京都目黒区大岡山2-12-1 〒152-8550 電話 03-5734-3645 FAX 03-5734-3649 E-mail: kiko.koho@sv4.jim.titech.ac.jp URL: http://www.titech.ac.jp/home-j.html